

お前、 ジョシユアだよ
.....

デフォルト名

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

アブノーマリテイのネタバレあり。エイプリルフルに投稿したかったけど製品版もうすぐらしいので、このバグともあと少しの付き合いかなって。深夜の試練テンションで一晩で書いた。眠かった。追記：渋に上げた。

目次

お前、シヨシユアだよ…… | 1

お前、ジヨシユアだよ……

俺の名前はジヨシユア。

クソつたれな職場だが、まあ、慣れたもんだ。自慢じゃないが俺はけっこうこのL o b o t o m y社でも長生きしてるし、アブノーマリテイの世話だつて腐るほどやってきた。命綱になるE・G・Oはミミックっていう最高クラスの装備を貰ってる。

単騎でアブノーマリテイの鎮圧に向かう。いつものことさ。単騎で笑う死体の山を鎮圧する。デイリークエストだ。たまに「何も無い」相手に壁役をやる。お前とのg o o d - b yはまだみてえだ。ああ、残念ながら静かなオーケストラ相手には出して貰えない。ただの物理的な攻撃はお呼びでないそうだ。

そんな俺でも昨日はヤバかった。もう何度も死ぬかと思つたね。

T-03-46というアブノーマリテイの登場は、この支部を崩壊の危機に陥れた。

職員12人を変異させたあの鐘の音は絶望そのものだったよ。さつきまで冗談を言い合つてた仲間が人間を辞めちまつたんだ。肉体を捨てて不死身のバケモノになった。仲間が仲間を大勢殺した。結局、俺たちはまだアブノーマリテイに対しての認識が甘

ジョシユアジョシユアジョシユアジョシユアジョシユア——

「ジョシユアって誰だよ！ 俺はジョシユアじゃねえ！」

飛び起きると、インカムから管理人の呼びかけが聞こえた。

『空虚な夢はずいぶんと愉快的な夢を見せるんだな』

冷たい管理人の呟きを最後に、通信は一方的に切られた。通信がこちらを省みない少々乱暴なものであるのはいつものことだが、なんだか動機がいつもと違う気がする。

「おい、大丈夫か？」

仲間の声で顔を上げる。心ここにあらずで主要部門に帰ってきた俺を心配してくれよう。きつと昨日の惨劇のせいで俺がまだ落ち込んでいると思っっているんだろう。確かに引きずってはいるが、仕事中にそんなことを考えている余裕はない。それは俺が一番よく分かっていることだった。

「いや、大丈夫だ」

やっぱり仲間という存在は良い。たったの一言で俺を立ち直らせてくれる。ジョシユアだなんだって夢も冷静になって考えれば馬鹿らしいじゃないか。

「そうだ新人が来たんだよ」

「そ、そうか」

「ちよつと話したただけだが、新人にしてはしぶとそうな奴だな。きつとお前も気にいるぞ」

仲間が休憩している新人を手招きして呼んだ。なんだかわからないが、嫌な予感がする。無意識のうちに冷や汗が頬を伝っていた。なんだ、この感覚は。ALEPHが逃げ

たつて平気な俺が。

「はじめまして！ 僕はジョー——」

「うわああああああああああああああああああああ！」

「ージアと言い……」

「おい、マズイ！ パニックだ！ 星の音呼んでこい！ ダ・カーポもだ！」

「なんでパニック者が出るんだよ！ 今収容違反はしてないぞ！」

「まじかよこいつつて正義心が人一倍強いんだぞシヤレにならねえよ！」

「パニックに釣られて罰鳥が逃げた！」

「ヤバくなる前に殺しちまえ！」

「ミミック装備だぞ殺してみろよ！ うわああこつち来る助けてくれえ！」

「ジャステイティア呼べジャステイティア！」

「ああああ審判鳥逃しやがった！」

「管理人！ 管理人！」

「赤ずきんの傭兵が逃げたぞ！」

「なんで大鳥も逃げるんだよ！ おい！ エンサイクロペディア間違ってるのか!？」

「憎しみの女王がなんで変身せずここに出てきッ……!？」

正気に戻った俺には、なぜか羽根が生えていた。

仲間から俺が連呼していたジョシユアとは誰だと聞かれたが、俺だって知らねえよ……。知らないんだよ……。ジョシユアって誰だよ……。